











ボーダレスなライン

20代のころに出会ったある宗教家が語った一言を時おり思い出す。

世界は「一〇・」（いち、えん、てん）で成り立っている、と。

宗教的、哲学的解釈はともかく、私は「一」とは、あっちとこっちを結ぶ線であるとともに双方を区切る境界（線）であり、「〇」は囲われた内と外を分かちつつも、すべてを包括する世界、「・」はその中心（点）であり、人間社会においてはそれぞれの個人であると理解している。

それを美術に置き換えれば、そのいずれもが造形の構成要素であるばかりか、表現思考の根幹を成すキーワードと言える。自作に照らしてみても、「一円点」に関連付けられる作品は少なくないが、私のスタートラインとなった「具体」の師・吉原治良の晩年の絵画には、文字どおりの「一〇・」が個別に描かれているなかで、いくつもの点が線状に連なり大きな円を形づくるものもあったことに改めて驚く。

以上の観点で昨年（2025年）に私が参加した展覧会から振り返るなら、国立国際美術館で開催された「コレクション | 戦後美術の円・環」展と、茨木市福祉文化会館における「ライフライン」展が挙げられる。

前者では起伏のある円形キャンバスと暗室で微動する映像作品《円》が展示・上映された。ともに私の1960年代の初期作で紛れもない「〇」そのものだが、後者では件の一つに収斂しきれない作品である。

円い二つのスピーカーを鉢合わせに合体、一つは1975年、もう一つは翌年のいずれも私の心臓音が発する《Two Heartbeat of Mine II》が、既設の巨大なシャンデリアの中心から心臓の高さに吊るされて赤絨毯の部屋で共鳴する。別室では破砕した陶製の招き猫の破片を1片ずつ象嵌した27個の石膏像《分身の術一招き猫》（2003年）が直径3メートルの円陣状に居並ぶ。加えて別のフロアでは赤信号が写る風景写真《レッド・ライト》のシリーズから1976年当時と再開した近年の各100枚ずつを水平・垂直に配した。

建物への直描きや映像、光、音を含む8人（組）からなる同展は、展覧会名の「ライフライン」が阪神・淡路大震災以降、インフラ的な生命線もしくは生活線の意味合いで広まったことから、ライフとラインを分けて考えにくい戸惑いがあったものの、美術館やギャラリーのホワイトキューブの空間ではなく、取り壊しを控えた地下2階、5階建ての多目的施設の全館をフルに使って繰り広げられたことが、よりスリリングかつユニークな展示へ導いたといえるだろう。

ともあれ美術における「一円点」もまた、その一つが前景化することはあっても、互いに他を召喚し干渉しあうボーダレスな関係であるのかもしれない。

今井祝雄







